

---

# いのちの穴

さっちゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いのちの穴

### 【コード】

N2432E

### 【作者名】

さつちゃん

### 【あらすじ】

生きる事に疲れた一人の男。死に場所をもとめ死を目前した時男は何を思っただろう。

## （前書き）

今回初めて投稿させて頂きました。字の間違いや表現の間違いなど多々あると思います。指摘などあればお願いします。最後まで読んで頂けたら幸いです。

(ぼつん、ぼとん)

水滴が地面に溜まった水たまりに落ちる音で目を覚ます。

辺り一面が真っ暗闇。

音も光もないこの場所。

今自分の頭の中にあるのはただ死ぬという事を受け入れるだけだった。

僕の名前は鮎川 悟史 28才 普通の会社員だ。毎日繰り返し訪れる日々に疲れきってしまい仕事辞め日本中を旅をする事にした。旅と言っても目的も行くあてもなくただ偶然通りかかったバスに乗っては降りひたすらに歩く。

だから今ここがどこかもわからない。ただわかるのはもう自分のいた世界には戻れないという事だけだ。

10日ぐらい前の事だっただろう。

あてもなくひたすらに歩き今は使われていない峠道を歩いていた。ふと峠道から山に入る獣道らしきものを見つけた。

その場所だけ草の長さが短かいだけなのになぜか獣道と誤ってしまった。無意識の内に何かに引き寄せられるようにその獣道に入ってしまった。今思えばただ入り口のようにガードレールが壊れていただけで獣道などとは到底言えないような道だった。歩くにつれて草が腰の辺りまで生えていて一歩先の地面すら見えない。どれぐらい歩いただろうか気がつくとも目の前に大きな口を開いた洞窟が見えてきた。洞窟の入り口は縦長のコンクリートでできており人工的に造られたように見える。

中を見てみた、暗闇が続いて1m先ですら見えない。自然とその洞窟へ僕は足を進めていた。洞窟の中ははじめじめじていて、足場はかなりぬかるんでいる。時より(ぼつん)と水滴の落ちる音がする。だんだん暗闇に目が慣れてきた。周りを見ると外観は人工的に造られた感じがするが中は壁も道も泥だらけで土を掘っただけといった感じがする。足場が悪い為歩く度に(ぐちゃぐちゃ)となんとも気持ち悪い音がする。

普通だったらこんなところに一人でいる事すら恐ろしいのに、今はなんとも思わない、というより感情すらなくなってしまったのだろうか。洞窟の奥は長く永遠に感じられた。前の方からとても心地よい風が吹いてくる。風が吹く方へ歩いた次の瞬間・・頭が真っ白になりなにが起こったのかわからない。ドンッと凄い衝撃を受け気絶してしまった。

(ぼつん)

頬に水滴が落ちてきて意識がもどり始めた重たいまぶたをゆっくりと開けた。

真っ暗闇でなにも見えない。立ち上がるとしたが体が言うことを聞かない。だんだん暗闇に目が慣れ始めてきた。目の前におさげ髪の女の子の石蔵のようなお地蔵様みたいなものが見えた。自分がいるところだけ一つの空間のようになっていた。なぜこんなところにいるのかわからなかった。上をみる一部分穴が空いているたぶんあそこから落ちてしまったのだ。足を見ると両足とも見るも無惨な形になっていた。

右足は膝から下が曲がらないであろう横に曲がってしまった。左足は力が入らず足は紫色に変色している。

周りを見渡しても四畳半ほどスペースに出口など見当たらず、外が見えるのは落ちたと思われる10m程上の天井だけだった。

僕はこの場所に閉じ込められた。

痛みは自然と感じなかった恐怖も・・・どうせ自分の生きている意味すらわからなくなり、人として生きる事から逃げ出したのだから

らここで死ぬ事になにも感じなかった。いやもしかすると望んでいたのかもれない。自殺などできるほど勇氣もない、かといってこのままのうのと生きて行ける程世の中は甘くない事ぐらいわかる。ちよつと死に場所を見つけて逆に安心していいのかもしれない。気づくと深い眠りについていた。どれぐらい眠っていたらうか、ふと目を覚ました。静寂の真つ暗闇中無意識の中昔の思い出が蘇ってきた。

まず頭に浮かんできたのは小学時代の僕だった。小学時代の僕は何がそんなに楽しいのか田んぼ道を笑顔で走っている。ただ走っているだけなのにあんなに笑顔になれるなんて……。思わず僕は微笑んでしまった。

次に浮かんできたのは中学時代。中学時代の僕は野球部だった。夏の太陽が照りつける中真つ黒に日焼けした僕が大きな声をだしながらノックを受けている。大量の汗を流し砂まみれになるうともボールに向かって全力でぶつかっている……。あのか頃は諦めたりなんか絶対にしなかった。真つ直ぐ目標に向かっていた……。

次に浮かんできたのは高校時代。高校時代は毎日なんやかんやバカやってほとんど勉強なんてしやしなかった初めて彼女が出来たのも高校時代だった。高校に入ってからちよつと不良っぽくなりたくて親に反抗したりもした……。気づくと僕は笑いながら涙を流していた。思い出を思い出す度に涙が溢れ出てくる。にたくない……。まだ死にたくない……。急に死ぬ事が恐ろしくなってきた。それと同時に今まで痛みを感じなかった足に激痛が走り僕は気絶した。

(ぼつん、ぼとん)

水滴が水たまりに落ちる音で目が覚める。

安心した……。まだ死んでない。

音も光もない。

空腹も限界、脱水症状のようで唇もカサカサだ。足の痛みで意識が揺らぐ。だが今度目を閉じてしまったらもう二度と起き上がれないと思った本能的に。穴から落ちどれくらい時間が立つただろう永遠に感じる程長い月日をここで過ごしているように感じられる。生きたいと思えば思うほど絶望感だけが僕を支配していく。もう死を受け入れるしかない・・・このまま眠ってしまえば楽になれる・・・。

枯れはてた目から最後の一滴の涙がこぼれ落ちた。  
ありがとう・・・そしてごめんなさい・・・。

急に眩しくなり一面の花畑が広がった。夢いやもしかしたらここは天国みたいなものなのだろうか僕は困惑した。現に僕は立っている自分の足で。一面に広がった花畑を見渡した。とても暖かくとてもいい香りがする。だが今までに見たことのない花だった。僕はその光景に見とれていた。

(ガッツ)

後ろから花の倒れる音がした。バツと振り向くとそこには可愛らしいおさげ髪の女の子が花を持ってこちらを見上げている。女の子の目線と合うようにしゃがんだ。女の子は不安そうな顔で僕にこう訪ねた。

「おにいちゃんなんでここにいるの?」

答えに戸惑っている女の子はこう続けた。

「だめだよおにいちゃん。おにいちゃんはまだここにきちゃ」

僕には言ってる意味がわからなかった。僕がなんでだいと訪た。

「ここはとてもあたたかくって、いいにおいもするけどさびしいとこだもん。ままにもあえないだよ。おにいちゃんはまだきちゃだめなの、」

僕は何となく理解した、生と死の間。

僕は女の子の手を取りじゃあ一緒に行こうと言った。女の子は首を横に振った。

「おにいちゃん、あたしねおにいちゃんのおかげでママにあえたんだよ。」

満面の笑顔で女の子が笑った。

「おにいちゃんありがとう。ばいばい」

女の子は大きく手を振り走って行った、その先に優しく微笑む母親らしき人が立っていた。女の子は母親の元にたどり着き寄り添い甘えた。母親がこちらに頭下げそのまま二人は微笑みながら光の中に消えて行った。とても暖かく、優しい気持ちになった。急に目の前が光に包まれた……

「悟……史、悟……史」

意識ははつきりしてないが誰かが僕の名前を呼んでいる。目を少しずつ開いていく。

「悟史、悟史」

目を開けるとそこには涙を浮かべた母親と父親の姿がた。夢か現実か周りを見渡してみる。僕はベットに横たわっている……病院？。泣きながら母親が僕にしがみついている。

生きてる……。

もう流せないと思った涙がとめどなく溢れ出てくる。父親は僕に泣き顔を見られたくないのか目頭を抑え病室をでていった。僕は年がらにもなく母親に寄り添い子供のように泣いた。とても暖かく、優しかった。そのまま僕はまた眠ってしまった。

なぜ助かったのか母親に聞いた時僕は驚愕した。僕が穴に落ちた翌日母親は夢を見たらしい。

おさげ髪の子が母親に僕が死んじゃうよって手招きをし洞窟まで案内するのだと言う。最初変な夢と思うただけらしいのだが3日間同じ夢を見続けるものだから、僕に連絡したが繋がらない為捜索願いを出したそうだ。今思うとあの女の子は石蔵のおさげ髪の女の子そっくりだった。僕が発見された時にはその石蔵なんてなかったらしい。穴のおかげで外に出れたのかもしれない。

僕は空に向かって独り言のようにつぶやいた。

（助けくれてありがとう僕はまだ行かないよ、お母さんと幸せにね）  
一瞬あの親子の幸せそうな笑顔が空に浮かんだ気がした。

あれから一年。僕はあの事故の為両足を失った。不便だけど生きては行ける。生きる事は辛く悲しい事もたくさんある。だけどそれも生きてる証。楽しい事だってそれに負けないぐらいたくさんある。幸せとはって考えると難しく僕にはわからないが笑顔になった時、人は幸せを感じると思う。あの親子の笑顔を一生忘れないだろう。今僕のできる事を1日1日がんばります。今僕は車椅子でボランティアの仕事しています。

終

(後書き)

私自身生きる事の難しさに悩む事があります。少しでも多くの方に  
生きるという事を考えて頂けたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2432e/>

---

いのちの穴

2010年12月29日02時15分発行